

昨年末、12月7日投票の台北市長選挙は、国民党現職の馬英九氏と民進黨新人、李心元氏との一騎打ちとなったが、下馬評通り、現職、馬氏の楽勝に終わった。

「民進黨員のなかに、なにがなんでも」という意気込みに欠けていたのは、李氏が当選すれば、落選した馬氏が再来年の総統選に出てくるという危惧があったからである。台北の市長選に落

たちにとって大きな痛手となった。陳政権の屋台骨がぐらりと傾いた感がある。

馬英九氏は、中国派へ自らを中国人と認識し中国との統一を目指す人たちのプリンスであり、エースである。甘いスマイル、流暢な語り口、ハンサムで長身、そして売りはスポーツマン。台北市内では圧倒的人気を誇る。陳総統のライバルであるとともに、台湾派の

こうした絶好のチャンスを狙って、馬氏が任期を残して市長をやめ、1年後の総統選に出馬する可能性はますます高まったといえる。台湾は今まさに、馬氏の動向を軸に、2004決戦に向けた死闘の火蓋が切っておろされた

感がある。それは、まさに「台湾という島」の命運をかけた戦いである。ところで写真は、選挙戦中に市の行事に出席した馬英九市長である。ご覧



選して、総統選で復活するというパターンは、現在、民進黨主席である陳水扁総統自らが拓いたリベンジロードである(陳氏は4年前の市長選で落選し2年前の総統に当選)。馬氏にそれを真似られては堪らぬというしりこみと陳政権の不人気がこの結末となった。

宿敵でもある。市長選は皮肉にも、馬氏の総統選参戦ムードをいっそう盛り立てる役割を果たして終わった。

市長選の最中、陳水扁総統、そして李登輝前総統が入れ替わり、てこ入れに入ったが、彼らがそばに立てば立つほど支持率が落ちるといふ情けない展開となった。発足当初、82%あった陳政権への満足度は11月末で38%にまで落ち込んだ(いずれも、中国時報)。

第九回 2パーセントの重み

柳本通彦

全人口の2%にも満たない。ましてや、台北市内に選挙権をもつ原住民はせいぜい数千である。しかし、馬氏は、憲法上、「原住民」と規定された人びとの支持を獲得しないうりこの島の領袖になることはできない。そのため、涙ぐましい努力を続けているわけ、それも民主化の一つの成果なのかもしれない。

台湾派のプリンスたる陳総統も、所詮は大陸から渡来した漢人の子孫である。原住民の土地を奪ってきた歴史の負い目がある。彼にとっても原住民の支持は不可欠で、総統当選後、各集落ごとに開かれる彼らの祭りにはこまめに



独裁者からチビッコに変身。旧紙幣上